

パラリンピックと戦争

— 「障害者スポーツ」を考える —

金メダルだけが価値？

2020年、江の島を会場にオリンピックのセーリング競技会が開催されます。これを受けて、藤沢でもオリンピックと共に開催されるパラリンピックに向けて「パラリンピックを機会に障害者への理解を広げよう」という言葉が聞かれるようになりました。

ぜひ、そうあってほしいと思います。ただそれには、パラリンピックのどこに・どのように注目するかの議論が欠かせません。

リオパラリンピックの際、マスコミの報道の中心は結局「金メダルの数」でした。たとえば2016年9月20日の産経新聞は、「史上初『金』ゼロの衝撃」との見出しでこんな記事を書いています。

パラリンピック・リオデジャネイロ大会で日本は史上初の金メダルゼロに終わった。2020年東京大会のホスト国としては「惨敗」と言っている。

目標とした「金10個」との乖離からは、日本パラリンピック委員会（JPC）の見通しの甘さに加え、長期的な強化戦略の不備など障害者スポーツが置かれた厳しい現実が見えてくる。

……次の東京大会まで4年。態勢のてこ入れは待ったなしだ。

もちろんスポーツである以上、「勝利」をめざすことは当然です。

しかし障害者スポーツが身体機能の優劣を競うだけで終わってしまえば、障害が軽い方が勝つに決まっています。けっして勝てるはずのない重度の障害者はどうすれば良いのでしょうか。

事実、パラリンピックの一部の団体競技では、できるだけ障害の軽い選手だけでチームを組む国もあらわれています。もしメダルだけが注目されるなら、「価値のある障害者」と「価値のない障害者」という障害者の二分を招きかねません。これで「障害者に対する理解」と言えるのでしょうか。

パラリンピックの起源

そもそもパラリンピックとは、どのようなものだったのでしょうか。

パラリンピックは、1948年にイギリスのストック・マンデビル病院で開かれたアーチェリー大会が原点とされています。この病院には第二次大戦で脊髄に損傷を負ったり、手足を失ったりした多くの兵士が入院していました。しかし彼らはなすすべもなく放置され、重い鬱を病み、失意のうちに亡くなっていく場合がほとんどでした。

ところが、この病院に赴任した医師のルードウィヒ・グットマンは、スポーツを通じて彼らに「希望」と「可能性」を与えようとします。

このときのグットマンの言葉が有名です。「失ったものを数えるな。残された機能を最大限に活かせ。」

これは画期的なことでした。多くの傷病兵がスポーツを通じてふたたび生きる希望を取り戻し、社会復帰を果たしていきます。



負傷兵のアーチェリー大会

たまたま、この場合はスポーツだったかもしれませんが。ですがグットマンの言葉はすべての障害者にあてはまります。

どんなに重度の障害であろうと、創作やコミュニケーションなど、さまざまな方法で何らかの「可能性」をみつけることができるはずで

全身が動かなくなる難病のALS患者が、まばたきだけでたくさんの表現活動を行っています。草間彌生は統合失調症の幻覚を芸術にまで高めました。

その姿は単に障害者だけではなく、普遍的な「人間の可能性」に通じます。そのようなものとして、私はパラリンピックの意味を考えてほしいと思うのです。

アスリートには負傷兵が

ですが、実際のパラリンピックの姿はどのようなものなのでしょうか。

忘れてはならないことがあります。現代のパラアスリートの中にも、多くの戦争による負傷兵が含まれているということです。

現にアメリカチームでは、10人に1人がイラクやアフガニスタンで負傷した米軍兵士と言われています。もともと肉体的に鍛錬されていた彼らは競技でも優位に立ち、メダリストに躍り出ることになります。

今年の5月、アメリカでパラリンピックの前哨戦となる負傷兵によるスポーツの世界大会、「インピクタスゲーム」が開かれました。

2年前から始まったこの大会には、今年は14か国およそ500人が参加しました。アメリカに次ぐ選手団を派遣したのは、同じくイラクやアフガニスタンに派兵したイギリスです。

ロシアとの領土紛争があったジョージアや、アフガニスタンからの参加者もありました。



インピクタスゲーム開会式

開会式に出席したブッシュ元大統領は、兵士たちに向けてこう演説しました。

「皆さんを誇りに思います。国のために尽くしたことに感謝を述べたい。皆さんに神のご加護を。」

パラリンピックはその起源も、そして現在も、「戦争」と分かちがたく繋がっています。

アスリートたちの努力を認めないわけでは決してありません。ですが、一歩間違えばブッシュ演説のように「戦場で負傷すること」を美化する道具に使われかねないのです。

そして、その対極にあるのは「国家の役に立たない障害者」の排除です。第二次世界大戦に先立って、ナチスドイツは20万人とも言われる知的障害者や精神障害者をガス室で虐殺しました。戦争の遂行に役に立たないからです。

オリンピックは本来、平和をめざすスポーツの祭典です。ぜひパラリンピックも「戦争によってあらたな障害者が生まれることのない世界をめざす」ためのものであってほしいと思うのです。

過程を重視するスペシャルオリンピックス

障害者のスポーツ大会はパラリンピックだけではありません。聴覚障害者のためのデフリンピックなど、さまざまな競技大会が開かれています。

中でも最大のものが、知的障害者の大会であるスペシャルオリンピックスです。パラリンピックに比べ、スペシャルオリンピックスは多くの障害者にとって、とても身近な存在です。

公益財団法人「スペシャルオリンピックス日本（SON）」のホームページには、「スペシャルオリンピックスのスポーツは結果よりも、過程を重視しています。（傍点は筆者）」とした上で、このような説明が掲載されています。

スペシャルオリンピックスは、知的障害のある人たちの成長にスポーツが大きなプラスになると信じ、またスポーツを通じて知的障害のある人たちと共に活動することは地域社会にとっても大きなプラスになると信じています。ですからスペシャルオリンピックスは性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考え活動しています。

「過程を重視する」スペシャルオリンピックスにも、もちろん勝敗はあります。順位もつきます。

ですが、同時に参加したすべてのアスリートがみな表彰されます。全員がメダリストなのです。



SONホームページより

表彰台の上では、全てのアスリートに、メダルやリボンがかけられます。順位だけでなく、競技場に立ち最後まで競技をやり終えた事に対して、一人一人にかわらぬ拍手が贈られます。

様々な考えはあるでしょう。

ですが私は、このスペシャルオリンピックスにこそ「参加することに意味がある」というオリンピックの本来の精神が体现されているように思えてなりません。

インクルーシブなオリンピックス

もちろん、私はパラリンピックのアスリートたちの活躍を「人間として」素晴らしいと思います。

でも、それならパラリンピックはもう「障害」を全面に出すのをやめて、オリンピックに統合してはどうでしょうか。

体重別の競技があるように、「車いす級」や「義足級」などを設け、純粋にアスリートとしてオリンピックに参加するのです。すでにテニスの全英オープンには「車椅子の部」があるのと同じように、です。

それこそが障害者権利条約の理念をふまえた、インクルーシブなオリンピックのあり方ではないのでしょうか。